

ためのものであるから、国家からの補助は受けていない。したがって他の場所の老人が入所するときには、必ずしも無料というわけにはいかない。たとえば、都市の工場を退職した「退休老人」と呼ばれる年金生活の老人がかつて入所していたことがあったが、この老人は退職した工場から貰う月40元の年金のうち20元を食事代として敬老院に納めていた。また、私たちが訪ねた明るる日に入所予定の北京市街の2人の老人のばあいは、北京市の民生局が月105元を敬老院に補助することになっていた。

中国では農業生産の増大とともに農民の生活水準が大幅に向上しつつあり、とりわけ大都市近郊の農民にこのことが当てはまると言う。したがって私たちが訪ねた北京と上海の農村は、中国の農村のなかでは比較的裕福な部類に属するだろう。南磨房郷も、私たちが上海で訪ねた長征郷ほどではないにしても、中国のなかではかなり裕福なほうであろう。中国の農村部では、退職者に年金が支給できるほど豊かな郷（人民公社）や生産大隊は限られているが、南磨房では、男60歳女55歳になると生産大隊から月30元の年金——敬老院の従業員の給料の半額——が支給されている（はっきりと確認できなかったのだが、敬老院に入所するとこの年金は打ち切られることになるらしい）。これは農民に支給される年金としては、額の高い方である。また、敬老院を運営できるほどの経済力をもった農村も非常に少なく、大部分の農村は南磨房には程遠い状況にあるにちがいない。したがって南磨房の敬老院は中国の老人ホームの代表例としては相応しくないかもしれない。しかし、

工業化および都市化の進展しつつある中国の農村が、これから先に向かう地点を示しているようには思われるのである。

### (3) 老人ホームII

#### ——上海第一福利院——

三上美美子

(社会保障研究所研究員)

社会福利学者友好訪中団の一行は、春爛漫の中国を北京～杭州～上海と旅した。北京では歴史の深さと雄大さに感嘆し、杭州では森と湖のしっとりした美しさに安らぎを覚えたが、上海は、また趣を異にし、活気ある港町の風情が感じられる都市であった。この上海で、我々は上海社会科学院のご厚意により、有料の老人ホーム、人民公社、退職者アパート等を訪問することができた。本節では、有料老人ホーム「上海第一福利院」での見聞をまとめておくことにする。

上海の老人ホームは、市のレベルで4つ、区のレベルで6つあり、いずれも“社会の孤老”（身寄りのない老人）を引受け、彼らの生活の面倒をみている。その中で上海第一福利院は、1978年に発足した市レベルの老人ホームで、唯一の有料（軽費）施設である。敷地6,600㎡に主要なビルは2つ（建物面積10,000㎡）、部屋面積は3,500㎡で、計500名の収容が可能である。1つのビルは目下建築中で、各室バス・水洗トイレ付きのモダンなホームとなる。この新ビルの明るいミルクコーヒー色の外壁は、旧ビル（我々が見学したところ）のやや寒々とした感じのするグレーのコンクリート壁とは、対照的であった。ビルが高層化しているのは、上海市内の最近の住



上海第一福利院(旧ビル)

宅難をそのまま反映しているように思われる。

この老人ホームはもともと、収入はあるけれども身寄りのない老人がいることから設立されたもので、入居者の中には、退職した大学教授、中学校教員、医師、技術者、幹部クラスの公務員なども含まれている<sup>1)</sup>。現在の入居者数は137名、彼らの年齢は62歳～102歳である。入居者は男女半々くらいであるが、高齢人口の男女比を考えると、入居割合は男子の方が高いことになる。「それは、男性は自分自身の面倒をみれる者が少ないからです」とのスタッフの方の説明に「どこの国でも同じですね」と、一同思わず笑いのこぼれる一幕があった。

ここで働いている職員は75名、医務要員は5名(医師2名、看護婦3名)、それに看護助手28名となっている。職員には初級医務要員レベルの訓練を受けた者が採用されている。これらスタッフの仕事は、大きく分けて、①生活管理、②給食、③医療管理の3つである。

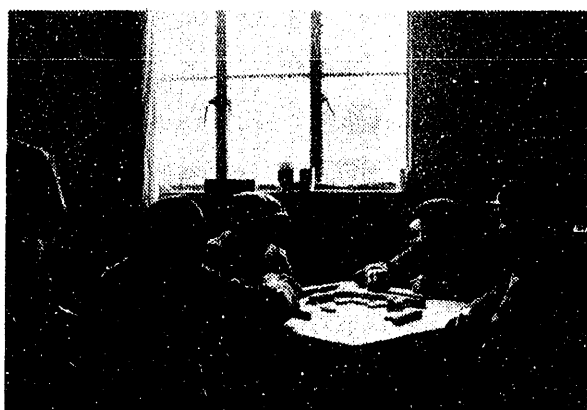
生活管理は、入居者の健康状況に応じてケアするもので、自分で全部自分自身の面倒をみれる者(入居者の9%くらい)、半分は自分でできる者、およびまったく自分でできない

者(約50%)という3クラスに分けて行なっている。たとえば、寝たきり老人には24時間の看護体制がしかれている。

給食サービスは、ビル内の食堂で提供され、入居者は日替わりのメニューの中から好きなものを買求める。食堂の入口に掲げられた黒板には、当日のメニューが4種類(もちろんどれも中国料理)書かれてあるが、値段は外のレストランよりも半額近く安いという。たとえば、エビの炒め物0.45元<sup>2)</sup>、豆腐・筍・肉の料理0.20元、青菜の炒め物0.05元、という具合である。

医療サービスとしては、当然ながら医務室が備えられ、さらに医師が入居者の部屋に向く巡回医療サービスも行なっている。急患や重病患者が発生したときには、近くの病院(上海第一医学院など市内の病院)に連れてゆく。これらの病院とは、ふだんからよく連絡をとっているという。

さて、我々が実際に交歓した入居者たちは、比較的元気なお年寄りばかりであった。部屋の中で囲碁に興じる人々、書道の腕前をみせてくれた初老の紳士、食堂の四角いテーブルを囲んでマージャンを楽しむ人々、皆仲良く暮している光景が印象深い。文化活動、娯楽、スポーツも盛んである。劇団の公演はたびたびあるし、春と秋には遠足や観光旅行などの外遊もある。今年の5月は上海植物園に出かけるそうである。足の不自由な老人は、ホーム内のカラーTVをみて楽しむこともできる。また、職員と入居老人との交流会も年2回開かれ、将棋、その他のゲームを通して相互の信頼関係を高めているようである。スポーツは、太極拳から散歩に至るまでさまざ



マーじゃんに興じる入居者

までである。入居者の一日は、毎朝6時15分の体操（主として太極拳）から始まる。6:45 AM朝食、11:00 AM昼食、5:00 PM夕食、9:00 PM消灯という早寝早起の生活である。

余暇活動の一方では、入居者は退職前の職業経験を生かして何らかの仕事をしている。たとえば、元教師は学校に招かれて話をしたり、元技師は機械の故障を直したり、書道の達人は地区の図書館から頼まれて文字を書いたり、足の不自由な老人は座ってできる紙細工の仕事をしている。そしてこれらの労働から得られる収入は、この老人ホームの食事の改善、植林、観光旅行、などの費用に役立てられるのである。

北京の南磨房郷敬老院や上海郊外の人民公社内の敬老院は、ゆったりとした庭や畑に恵まれ、家畜の飼育や野菜の栽培を行なっていることに比べると、上海第一福利院はやはり都会型の老人ホームということになるだろうか。それでも、“お月見”のときは近所のマーケットが月餅菓子を2,000個もって来てくれたとか、衣服店は毎月来訪して入居老人の服を仕立ててくれるなど、コミュニティの中の協力関係がうかがえる。

最後に、入居者の費用について記しておこう。入居者1人当りの予算としては人件費<sup>3)</sup>を含めて1ヵ月58元とされているが、実際にかかる費用は平均して40~50元くらいである。本人負担分は、食費+雑費でよい。食費は、普通1ヵ月20元以上かかるが、なかには40元も使う大食家もいるという。雑費は5元と決まっている。したがって合計1ヵ月25~45元支払うことになる。ただし自炊する者は、光熱費がかかるため60元の負担となる。入居者は50元以上の年金を受給しているので、これらの費用負担に問題は生じない。

中国では今、老人問題に強い関心が寄せられていると、訪問先でたびたび聞かされた。上海では、社会学会に所属する民間組織として、上海老人問題研究会もつくられ、学者による老人問題研究も進められている。メンバーは約100名の学者で、上海第一福利院の張院長や上海社会科学院から我々一行に付き添って来て下さった杜外事所長も、この研究会のメンバーである。また、研究会のメンバーである退職医師は、この老人ホームに来て研究しているということである。経済発展による近代化を進める中国で、福祉を置き去りにしないという努力が感じられた。人口の高齢化とともにますます増大し（そしておそらく変化してゆくかもしれない）老人福祉サービスの需要をどのように充足してゆくかは、今後の課題となるであろう。

筆者にとっては初めての中国訪問であったが、広大な大陸と長い歴史にはぐくまれた中国の人々の表情には、明日への自信と活気が見なぎっているのが読みとれた。

- 注1) 中国の定年退職年齢は、男子 60 歳、女子は労働者が 50 歳、政府勤務者が 55 歳となっている。
- 2) 1 元≒115 円
- 3) 介護要員の 1 ヶ月の給料は 50~60 元、年配者の中には 60 元以上の者もいる。

### 3 中国社会保障の転機

福 武 直

1976 年 12 月、私は、第 1 次東京大学教授友好訪中団長として中国を 33 年ぶりに訪ねた。その訪中報告は、翌年私の編著『現代の中国』（東京大学出版会刊）として出版したが、そのときの印象は、戦時中この国の農村調査から研究者の生活を始め、当時の実情を見聞した私にとって、きわめて強烈であり、中国の社会保障の手厚さについても感嘆させられた。

しかし、その後間もなく、中国の退休金（退職養老年金）は、あまりにも高すぎると思うようになった。このことは、1979 年春社会学者訪中国をひきいて訪ねたとき、一方で工人新村（労働者集合住宅）で優雅に暮している退職労働者と、下放から帰って職よこせデモに加わっている待業（失業）青年とを対比して、一層強く感じさせられた（私の編著『現代化中国の旅』東京大学出版会 1979 年参照）。そして、1982 年日中社会学会訪中団を組織して戦後第 3 回目の訪中を試みたとき、私は、中国の学者たちに、今後の高齢化の進展を考慮するばあい、既得権者の年金を切り下げるわけにもいくまいから、早急に改革の方途を探るべきだと話した。1 人っ子政策には同調しがたいが、人口抑制策は必要であり、この点を勘案すると、扶養する世代の負担が過重

になるのは必至で、改革は切実な課題になるとも付言した。しかし、この提言に対する反応は、北京においても、上海においても、各事業体（単位）が退休金も留保するので心配無用という感じで、私の主張はあまり関心をよばなかった。

ところが 1. はじめに、で記したように、このたびの反応は、前回とは違った。中国においても、この問題が自覚されるようになっており、私たちが出発する直前、1984 年 4 月河南省鄭州において、後述するように、保険福利問題学術討論会が開催され、改革の方策をめぐる討議が行なわれたことが、4 月 23 日付の『人民日報』で報じられた。こうして、中国の社会保障も、ようやく転機を迎えようとしているのである。

ここでは、このことについて若干の報告をしたいと思うわけであるが、社会保障といっても広く全般にわたることはできない。中国の社会福祉については、学ぶべきことも多く、とくに今回は、上海市内に 3000 組あるという孤老の援護組織、包護組に関心をかきたてられ、在宅福祉の仕組みを次回には是非とも追求したいと思った。しかし、こうした福祉サービスは、論及の対象外とし、もっぱら所得保障とくに老後の所得保障を、労働者を中心に、その転換の萌芽が何故にあらわれたか、その萌芽はどのように展開するであろうか、という問題意識で若干説明してみたいと思う。

#### (1) 社会保障の現行制度

中国の社会保障制度は、都市と農村とで異なる。

農村においては、いわゆる五保制度によっ